

Valsalva 洞動脈瘤に対する 4 手術例

【目的】 Valsalva 洞動脈瘤は比較的まれな疾患で、全開心術中の 0.13～0.23%とされている。手術適応に関しては、動脈硬化性動脈瘤のような瘤径に基づいた手術適応基準はない。今回、我々の経験した Valsalva 洞動脈瘤 4 例について検討する。【方法及び結果】 症例 1：71 歳男性。近医での精査にて LMI を含む冠動脈 3 枝病変を指摘され、胸部 CT にて 19mm の右 Valsalva 洞動脈瘤を認めた。大動脈弁輪の拡大及び大動脈弁逆流は認めなかった。瘤口をふさぐように上行大動脈内腔から人工血管でパッチ閉鎖した。同時に CABG を施行した。 症例 2：75 歳男性。髄鞘重に対する術前の心エコーにて AAE、AR を認めた。CT にて 32mm の右 Valsalva 洞動脈瘤を認めた。AR は軽度であり、David 手術を施行した。 症例 3：54 歳女性。動悸、倦怠感を主訴にて近医を受診。心エコー及び CT 検査にて重症 AR 及び左 Valsalva 洞動脈瘤を指摘された。瘤より左冠動脈が起始していた。Bentall 手術を施行。左冠動脈の再建は SVG を使用し Piehler 法にて行った。 症例 4：60 歳女性。呼吸苦を主訴に近医を受診。心エコー及び CT 検査にて重症 AR 及び右 Valsalva 洞動脈瘤を指摘され当科紹介。瘤より右冠動脈が起始していた。AVR 及び人工血管による Valsalva 再建を施行。右冠動脈は基部にて結紮し CABG を施行した。【結論】 Valsalva 洞動脈瘤に対する治療方針に関しては、症状や破裂の有無により異なる。今回 Valsalva 洞動脈瘤 4 例を経験したが、症例に応じた適切な術式を選択することが重要であると考ええる。